

活 動 報 告

共同研究グループ活動報告（2019 年度）	54
講演会要旨	64
購入文献解題	67
所員自著紹介	69

共同研究グループ活動報告（2019 年度）

日中関係史

2019 年 3 月には論文集・『中国人留学生と「国家」・「近代」・「愛国」』（東方書店）を刊行し、その後、合計 5 回の例会を開催することができた。また、科研・教育交流（基盤 B・一般、課題番号 17H02686）の支援を得て、2019 年 9 月には江蘇師範大学と中山大學で開催された研究会に研究メンバーが参加し、報告を行った。11 月には台北で開催された「東アジア日本研究者協議会第 4 回大会」のパネルに参加した。以下、本年度に開催した研究会活動を箇条書きで記す。

(1) 第 67 回例会「阿部洋先生を囲む会」開催

◎日時：2019 年 5 月 25 日（土）

◎場所：神奈川大学横浜キャンパス 3 号館 406 室

◎共催：中国人留学生史研究会、科研・教育交流（基盤 B・一般、課題番号 17H02686）

◎内容：

- （一）「清末期日本の蚕糸業学校に学んだ中国人留学生について」王怡然（京都大学大学院博士後期課程 3 年）
- （二）「清末、中国人日本留学生の近代国民意識の覚醒について——1896 年から 1901 年までの留学生界に着目して」孫瑛鞠（岡山大学、非常勤講師）
- （三）特別講演——「我が教育史研究を振り返る」阿部洋（福岡県立大学名誉教授）



(2) 第 68 回例会の開催

◎日時：2019 年 6 月 29 日（土）

◎場所：神奈川大学横浜キャンパス 20 号館 212 室

◎共催：中国人留学生史研究会、科研・教育交流（基盤 B・一般、課題番号 17H02686）

◎内容：

- （一）「清末における湖北省留日学生と帰国後の行動」王鼎（新潟大学、博士課程）
- （二）「満州国留学生と日本」李思済（一橋大学、博士課程）
- （三）「戦後日華学会と華僑留日学生の招致」陳珂琳（東北師範大学、博士課程）



(3) 第 69 回例会「書評会——著者との対話」開催

◎日時：2019 年 9 月 15 日（日）

◎場所：明治大学駿河台キャンパス・研究棟 2 階第 9 会議室

◎共催：明治大学史資料センターアジア留学生研究会、中国人留学生史研究会、アジア教育史学会、科研（基盤 B・課題番号 17H02686）

◎内容：

（一）『中国人留学生と「国家」・「愛国」・「近代」』の書評

①土屋光芳（明治大学）、②鈴木将久（東京大学）、③張一聞（明治大学博士課程）

（二）『戦前期アジア留学生と明治大学』

①大里浩秋（神奈川大学名誉教授）、②欒殿武（武蔵野大学）、③中村みどり（早稲田大学）、④見城悌治（千葉大学）、⑤孫安石（神奈川大学）



(4) 第 70 回例会・国際円卓会議「日中関係史研究の新たな潮流——摩擦・受容」の開催

◎日時：2019 年 11 月 16 日土曜日

◎場所：神奈川大学横浜キャンパス 3 号館 408 室

◎共催：中国人留学生史研究会、科研・教育交流（基盤 B・一般、課題番号 17H02686）

◎司会：孫安石（神奈川大学）

（一）「中国の留学生研究の最新動向について」周綿（江蘇師範大学・教授）

（二）「1920～30 年代、中国の留学教育問題争論」楊曉（遼寧師範大学・教授）

（三）「日中関係史と中国人留学生研究の意味」大里浩秋（神奈川大学名誉教授）

（四）「清国留学生と振武学校・陸軍士官学校について」浜口裕子（拓殖大学）

◎討論：川島真（東京大学）、見城悌治（千葉大学）



(5) 第 71 回例会開催

◎日時：2019 年 12 月 21 日（土曜）

◎場所：神奈川大学 20 号館 212 室

◎内容：

（一）「朱紹文と日中戦争期の日本留学——第一高等学校特設高等科・東京帝国大学経済学部を中心に」田島俊雄（東洋文庫研究員）

（二）研究会の運営報告

◎主催：中国人留学生史研究会、科研（基盤 B・課題番号 17H02686）

（文責 孫安石）

色彩と文化Ⅳ

「言語景観」を研究の軸とし、「観光」と「外国語教育」に応用できる理論的枠組みを模索しつつ言語ごとに調査・発表を行なっている。

(1) 研究会の開催

第1回研究会

開催日：2019年8月6日（火） 14：00～16：00

会 場：国際文化交流学科準備室（17号館315室）

発表者1：鈴木慶夏（本学中国語学科教員）

テーマ：日本における中国語の言語景観の現状

——あなたが旅行者だったらどう思いますか？

発表者2：尹亭仁（本学国際文化交流学科教員）

テーマ：日本における韓国語の言語景観の現状——韓国語教育への活用性と問題点

第2回研究会

開催日：2019年10月7日（月） 14：00～16：00

会 場：国際文化交流学科準備室（17号館315室）

発表者1：鈴木幸子（本学国際文化交流学科教員）

テーマ：日本における国際観光の現状と課題

発表者2：尹亭仁（本学国際文化交流学科教員）

テーマ：ロンドン・パリ・ウィーンの言語景観：観光の観点からの公共表示の比較

(2) 海外調査

さらに、2019年3月12日～18日の7日間、ロンドンでの調査を計画している。2014年に発表したニューヨークでの言語景観との比較に加え、ロンドンにおける日本語、韓研究会実施後には、多角的な討議だけでなく、本研究課題が学術的にも実践的にも発展できるような方法論を議論する等、有意義な研究成果を導き出せるよう常に留意している。

- ・尹亭仁：2019年7月25日～28日、台北
[台北の言語景観を東京・ソウル・北京との比較の観点から]
- ・尹亭仁：2019年8月18日～29日、ロンドン・パリ・ウィーン
[ロンドン・パリ・ウィーンの言語景観を観光の観点から調査]
- ・尹亭仁：2020年2月24日～3月1日、ブダペスト（予定）
[ブダペストにおけるハンガリー語およびEU加盟国の言語景観の調査]
- ・尹亭仁：2020年3月22日～28日、ニューヨーク（予定）
[ニューヨークとヨーロッパ（ロンドン・パリ・ウィーン）の言語景観を比較の観点から調査]
- ・李忠均：2019年9月1日～5日、ソウル
[ソウル市・ソウル駅および周辺商業施設の観光視点による調査]

(3) 国内調査

- ・鈴木幸子：2019年7月29日～30日、平泉文化遺産および周辺地域
[当該地域にて、主に外国人訪日観光客への言語対策を調査]
- ・鈴木幸子：2019年8月20日、世界遺産富岡製糸場および周辺地域
[当該地域にて、主に外国人訪日観光客への言語対策を調査]
- ・鈴木幸子：2019年8月23日～25日、宗像・沖ノ島と関連遺産群および太宰府
[当該地域にて現地学芸員の案内等により、観光情報・観光政策を含めた実地調査]

- 鈴木幸子：2019年9月15日～17日，大阪および関西国際空港周辺における観光スポット
[大阪市内にて外国人訪日旅行客に人気がある観光地を現地調査]
- 鈴木幸子：2020年2日（予定），横浜中華街
- 佐藤裕美：2019年9月1日～11日，スイス・ティチーノ州ルガーノ
[スイスのイタリア語圏におけるイタリア語と他3公用語＋英語の言語景観における出現率を調査]
- 鈴木慶夏：2019年9月17日～21日，北海道東部における観光スポット
[阿寒摩周国立公園，知床国立公園および周辺地域を中国語圏からの訪日観光客視点で調査]
- 鈴木慶夏：2019年9月27日～28日，宮崎県宮崎市
[宮崎空港および宮崎市内を中国語圏からの訪日観光客視点で調査]
- 高木南欧子：2019年10月16日～11月3月
[神奈川大学横浜キャンパスの言語景観を留学生の視点から調査]
- 佐藤梓：2019年10月16日～11月16月
[白楽駅・みなとみらい駅周辺の言語景観を留学生の視点から調査]

2019年度は、「多文化共生社会の言語景観——観光立国日本の多言語表示と情報発信を再考する」という研究課題（代表者：鈴木幸子，メンバー9人）で学内の「共同研究奨励助成金」に応募した。2020年度は本格的に研究活動を行なう計画である。

（文責 尹亭仁）

言語変異研究

1. 研究内容：今年度は主に古代中国の訓詁学者たちが施した敬語・ポライトネスの注釈について，歴史社会語用論の視点から体系的な調査と分析を行った。論文の執筆は，歴史語用論と歴史的言語景観に関するものを中心に行った。
2. 今年度の主な研究成果：
「漢代訓詁學中的“禮貌”功能釋義——歴史社会語用學探源」『国際漢語學報』（第10巻）上海學林出版社 2019年 p25-47
3. 今年度主な研究所蔵資料の収集：
『明画全集・唐寅』浙江大学 2018年
『明画全集・仇英』浙江大学 2018年
『明画全集・徐渭』浙江大学 2018年
4. 2020年度は引き続き歴史社会語用論と歴史言語景観について研究調査を実施する予定である。

（文責 彭国躍）

〈身体〉とジェンダー

1. 講演会・研究会の開催
 - 第1回研究会（講演会）
開催日：2019年7月24日（水）
会場：17号館216室
発表者：熊谷謙介（本学外国語学部教授）
演題「母・アメリカ・減退する性——ロマン・ガリにおける男性性」

2. シンポジウムの開催 なし

3. 活動内容

〈身体〉とジェンダー研究会は『68年の〈性〉』を2015年度に出版したが、その後に続く企画として、男性表象をテーマにした叢書の出版を目指して発表を組織してきた。今年度については第1回研究会で、研究グループメンバーの熊谷謙介が「母・アメリカ・減退する性——ロマン・ガリにおける男性性」という演題で発表した。ユダヤ系の家系に生まれ、ロシア、ポーランドから母息子二人でフランスに移住し、第二次世界大戦に航空士として従軍、戦後、女優ジーン・セバーグと結婚し、彼女の死後自殺した、ロマン・ガリの小説作品を男性性の観点から分析するものであった。一見「マザコン」「冒険家」「マッチョ」にも見える彼の、ジェンダーに関する思想と、作品における複雑な男性像を示し、とりわけ母息子の関係やユダヤ性と男性性の関係について議論を行った。

また2017年度から2019年度までの研究会をもとにして、学内のメンバー、また20世紀ドイツ表現主義をジェンダーの観点から分析する西岡あかね氏（東京外国語大学）、クィア・スタディーズを中心に研究を進める菅沼勝彦氏（タスマニア大学）、2018年度に本学を退職したアメリカ文学を専門とする山口ヨシ子名誉教授、中国近代文学を専攻する中村みどり氏（早稲田大学）にも執筆をいただき、神奈川大学人文学研究叢書44『男性性を可視化する——〈男らしさ〉の表象分析』（青弓社、2020年2月）を完成させた。叢書目次については以下の通りである。

序 文 マスキュリティ、二十世紀、表象 熊谷謙介

第1章 表現主義のマチズモとアウトサイダー性 西岡あかね

第2章 新しい男の誕生？——ダダにおける「新しい人間」のマスキュリティ 小松原由理

第3章 洪深のアメリカ留学体験——自伝における人種差別・恋愛、そして演じること 中村みどり

第4章 男らしくない西部劇小説『シェーン』——冷戦期アメリカの核／家族 古屋耕平

第5章 「人間らしさ」への道、「男らしさ」への道——エリソン『見えない人間』 山口ヨシ子

第6章 母、マジョリティ、減退する性——ロマン・ガリと男性性 熊谷謙介

第7章 翔ばなかった王子——マシュー・ボーン版『白鳥の湖』にみる男性性と現代社会 菅沼勝彦

第8章 現代美術にみる狩猟と男性性——おとぎ話研究の視点から 村井まや子

今後は本叢書について議論し合う研究会を開催し、「〈身体〉とジェンダー」研究グループが今後どのような主題のもとで、研究会を続けていくかを検討する予定である。

（文責 熊谷謙介）

自然観の東西比較

1. 講演会・研究会の開催

第1回研究会（講演会）

開催日：6月26日（水）

会 場：17号館216室

講演者：黒住真（東京大学名誉教授）

演 題：「人文学研究叢書43『自然・人間・神々——時代と地域の交差する場』を読む」

第2回研究会

開催日：7月31日（水）

会 場：17号館216室

報告者：山本信太郎（本学外国語学部准教授）

演 題：「聖ウィニフリッドの泉への巡礼——夏至の祭礼行列とミサを中心に」

2. 活動内容

本研究グループは、2019年3月に人文学研究叢書43『自然・人間・神々——時代と地域の交差する場』を刊行した。本年度は、その内容を振り返る研究会（講演会）、および研究を継続した調査報告についての研究会を行った。

第1回研究会（講演会）では、東京大学名誉教授である黒住真氏をお招きして、『自然・人間・神々』の全体および個々の論文についての批評を講演して頂いた。質疑応答を含め、活発な議論が交わされた。黒住氏の指摘は執筆者にとって、また研究グループにとっても視野を広げる契機となる有益な内容であった。

第2回研究会は、『人間・自然・神々』で「ウェールズにおける聖なる泉への巡礼——中世から近世の聖ウィニフリッドの泉」を著した山本先生が、継続研究として聖ウィニフリッドの泉にかかわる祭礼について現地調査を行った結果の報告・研究会である。ここでも活発な議論が交わされ、特に「水」をめぐる思想・宗教的な問題が浮上し、研究グループにとっての新たな研究の方向性を示唆することとなった。

退職された名誉教授・伊坂先生は、客員研究員として本研究グループの研究会に参加されつつ、独自の研究活動を継続されている。その成果を、2019年10月11日から12月6日にかけて5回の公開講座「世界史の中の日本文化——先史・古代篇」（神奈川大学生涯学習・エクステンション講座）で報告された。その内容は、『自然・人間・神々』で著されたヘーゲルの『世界史の哲学講義』（伊坂訳、講談社学術文庫上・下）に関する論考を基盤にして、ヘーゲルが書かなかった日本の文化を世界史の中に位置付けるべく発展させたものである。

今年度は、研究会の開催は少なかったが、メンバーそれぞれが研究を継続し、グループとしても自然観に関する新たな具体的なテーマを模索しつつある。

（文責 上原雅文）

ヒト身体の文化的起源

活動内容

① 人間の身体を系統的に遡り、その根源を考察することで、身体が持つ機能的な意義を検討した。

I. ランニング時の足着地法の違いがアキレス腱長や筋束長に及ぼす影響に関する論文「Forefoot running shorter gastrocnemius fascicle length than rearfoot running」が Journal of Sports Sciences 誌に掲載された。

II. アキレス腱の屈曲点の位置と増幅効果との関係性を調べた論文「Biomechanical gain in limb displacement from the curvature of the Achilles tendon: role of the geometrical arrangement of inflection point, center of rotation, calcaneus」を執筆し、投稿した。

III. 以下の研究セミナーを開催した。

「Jリーグトップチームにおけるゲーム分析——横浜FCにおけるアシスタントコーチの役割——」竹中達郎氏（横浜FCトップチームアシスタントコーチ）、1月10日

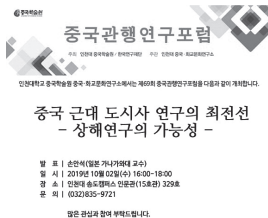
（文責 衣笠竜太）

NCH 新聞研究会

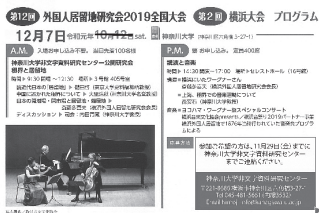
1. 研究内容：本研究会は、神奈川大学が所蔵する NCH（North China Herald）新聞（ONLINE 版）の日本、中国、韓国、東南アジア諸国に関連する新聞記事の研究を目指している。

2. 活動内容：

（一）2019 年 10 月 2 日、韓国の仁川大学で行われた招待講演「中国近代都市史研究の最前線」で神奈川大学が所蔵する NCH（North China Herald）新聞のデータベースを紹介することができた。



（二）2019 年 12 月 7 日に開催された「外国人居留地研究会 2019 年全国大会」の午後の部「講演と音楽」において「上海租界での音楽活動について」の報告を行った。同報告の主な内容は、神奈川大学が所蔵する NCH（North China Herald）新聞のデータベースを利用した研究成果であった。



（文責 孫安石）

日韓対照言語研究

「日韓対照言語研究」は「日韓両言語におけるヴォイス・テンス・アスペクト・モダリティの対照研究」を課題として掲げ、研究活動をすすめてきた。2020 年度からはすそ野を広げて中国語を加えた形で、「日中韓対照言語研究」を本格的に稼働させる計画である。

（1）研究会の開催

日時：2019 年 7 月 22 日（月） 17：00～19：00

場所：国際文化交流学科準備室（17 号館 315 室）

発表者 1：尹亨仁（本学国際文化交流学科教員）

テーマ：「空間と時間表現における助詞「ノ」について

—— 日韓対照言語研究の観点から」

発表者 2：相沢勇輝（本学外国語学研究科中国言語文化専攻博士課程）

テーマ：「空間と時間表現における助詞「ノ」について

—— 日中対照言語研究の観点から」

年2回以上の研究会を計画しており、来年度は対照言語研究の観点から中国語や英語のテンス・アスペクトの研究者にも発表してもらう予定である。また海外で対照研究を行なっている研究者にも発表と交流の機会を持つ計画である。

(文責 尹亭仁)

各国近代文学の研究

1. 講演会・研究会の開催

第1回研究会（講演会）

開催日：2019年7月19日

会場：17号館216室

発表者：千石英世氏（立教大学名誉教授）

演題：モダニズムの芸術と文学

第2回研究会（講演会）

開催日：2020年1月31日

会場：17号館216室

講演者：山崎彩氏（東京大学特任研究員）

演題：アドリア海北部の多民族共生地域におけるイタリア語文学

2. 活動内容

本研究グループは、活動3年目である。研究対象の時期的な重なりを基軸に据えながらも、研究をめぐる方法や環境・場の異なりについて相互に意識し、意見交換をしながら、領域横断的な近代文学研究の方向性を模索していく。今年度は、2回の講演会を開催し、ゲストを招いた講演を開催し、専門領域を異にするメンバーがそれぞれの立場から質疑・意見交換を行い、お互いの知見を深めた。

(文責 松本和也)

知覚認知システムの普遍性と多様性

講演会・研究会の開催：なし

シンポジウムの開催：1回

The 1st Symposium on Perception and Cognition Systems for Nature of Plausibility

Date and time: Friday, 29 November 2019, 15:30–18:00

Venue: Room 402 on the 4th Floor of Building 3, Yokohama Campus, Kanagawa University, Kanagawa, Japan

Program

Professor Nick SCOTT-SAMUEL (Psychological Science, University of Bristol)

“Defensive coloration: somethings we know, and some things we'd like to know”

Over the last decade or so, there has been an explosion of interest in the principles that might underlie camouflage: how can one prevent or disrupt the detection, identification, selection or targeting of a prey item? These sorts of question are best addressed from an interdisciplinary perspective, drawing on the knowledge of biologists and psychologists amongst others. I will give an overview of what we know so far, with particular reference to research from CamoLab (www.camolab.com), and then talk about some outstanding issues, in particular attempts to categorise and quantify different camouflage

strategies.

Assistant Professor, Kentaro ONO (Brain, Mind, and KANSEI research center, Hiroshima University)

“Effects of perceptual grouping in the brain processing of sounds”

What is perceptual grouping? Perceptual grouping occurs when we are perceptually put parts together into a whole. Auditory inputs are a mixture of sounds produced by several simultaneous sources. However, we rarely perceive these sounds as incomprehensible noise. While psychological studies have found several principles for perceptual grouping, neural correlates of perceptual grouping remain unclear. Here, I shortly review some neuroimaging studies of perceptual grouping and introduce our studies that have shown neurophysiological correlates of it.

活動内容：

本研究グループは、人の知覚・認知の仕組みについて、研究することを目標としており、特に、知覚の様相や認知的様相に共通な普遍性とそれらの様相の相互効果によって展開した多様性を現象・行動観察や計算論的解析などを通して明らかにする活動を行うために共同で取り組んでいる。

本年度は、「尤もらしさ感と違和感の知覚・感性・認知科学的機序の解明」を促進するために、当該分野の国内外の第一人者の研究者2名に公演を依頼し、参加者による活発な議論とともに盛況に終わった。

(文責 吉澤達也)

学びの見える化研究会

(1) 研究会の趣旨

専門職等の人材育成の見える化を行い、教育・学習のあり方や体系化を検討する。

「学び」に関わる各自の研究テーマを持ち寄り、研究報告及び意見交換を行う。

(2) 各自の研究テーマ

①学内研究者

テーマ1 「潜在的ボランティアの力をいかに引き出すか」

齊藤ゆか（神奈川大学人間科学部・教授）

テーマ2 「学校体育におけるダンス授業の指導観の育成について」

太田早織（神奈川大学人間科学部・助教）

②学外研究者

テーマ3 「人材育成の見える化を進める方法論」

森和夫（株式会社技術・技能教育研究所・代表取締役・神奈川大学人文研究所・研究員）

テーマ4 「青年教育——個人化と社会化の一体的支援／子育て支援——子育て学の体系化」

西村美東士（聖徳大学・元教授、神奈川大学人文研究所・研究員）

③参加メンバー

テーマ5 「若年無業者に対する支援のあり方に関する検討」

新宅圭峰（認定特定非営利活動法人育て上げネット・役員）

(3) 研究日の日程

4月20日、5月18日、6月8日、6月15日、6月29日、7月6日、7月20日、9月7日、9月21日、10月19日、10月26日、11月2日、11月16日、12月14日、12月21日、1月11日、1月25日、2月15日、2月29日（全19回、これから実施予定も含む）

(4) 研究の成果（報告）

齊藤ゆか（2019）『『潜在的ボランティア』が活動に踏み出す条件設定と環境づくり』『生活経営学研究』54, pp. 50-59

新宅圭峰, 工藤彰子, 齊藤ゆか（2019）「NPO における『電子カルテシステム』導入の効果性——教育 ICT とそれを活用する業務プロセスの実装——」『神奈川大学心理・教育論集』（46）, pp. 97-111

森和夫（2019）「人材の見える化が可能にする能力開発～CUDBAS 手法による能力マップ作成で効率的な人材育成を実現する～」『企業と人材』pp. 33-39, 産労総合研究所。

森和夫（2019）「充実した院内教育につなげる組織・部署にあわせたラダー作成～クリニカルラダーと能力マップが拓く院内教育の新しい姿～」『看護人材育成』Vol. 6 No. 2, pp. 2-8, 日総研出版。

森和夫（2019）「ものづくりを支える技能とその継承のあり方～これから求められる技能とは何か, 次代へ継承するにはどうするか～」『職業研究』巻頭言, p. 3, 雇用問題研究会。

森和夫（2019）「能力把握に基づく人材育成の方法～求める人材像, 今いる人材の能力マップを作成して, 人材育成の方針から指導育成までを効率的にする方法～」一般財団法人 職業教育開発協会, セミナーテキスト 50 頁。

森和夫（2019）「暗黙知指導の理論と実際～生産性を向上させる暗黙知の指導は重要課題, その理論と実際を演習で学ぶ講座～」一般財団法人 職業教育開発協会, セミナーテキスト 60 頁。

西村美東士（2019）「体験的リカレント論」, 全日本社会教育連合会企画・日本青年館『社会教育』876 号 pp. 24-30

西村美東士（2019）「子育てボランティアの学習プログラム作成と資格認定～「現場力」を支える子育て支援学の体系化をめざして～」日本子育て学会第 11 回大会報告

（文責 齊藤ゆか）

臨床心理学研究

2019 年度の活動

2016 年に公布された公認心理師法によって, 日本で初めて心理職の国家資格が誕生したが, 2019 年度は公認心理師についての研究を行った。日本では長く文部科学省が関わる民間資格である臨床心理士（日本臨床心理士資格認定協会）が代表的な心理職の資格であったが, 国家資格である公認心理師は民間資格の臨床心理士とは違う法的な責務があり, 違反により刑事罰の対象にもなり得るなど, 様々な相違点がある。本研究グループでは, この臨床心理士と公認心理師の違いについてメンバーそれぞれが理解を深め, 共有する研究活動を行った。

（文責 杉山崇）

講演会要旨

1. 演題：「人文学研究叢書 43『自然・人間・神々——時代と地域の交差する場』を読む」

講演者：黒住 真

開催日：6月26日（水）17:00～20:00

会場：17号館 216室

共同研究グループ「自然観の東西比較」で、東京大学名誉教授である黒住真氏をお招きし、人文学研究叢書 43『自然・人間・神々——時代と地域の交差する場』の全体および個々の論文についての書評をしていただき、議論を行った。

まずそれぞれの論文を批評する講演がなされ、それに対して執筆者からの応答、そしてさらに黒住氏の意見、という形で活発な議論が交わされた。黒住氏はそれぞれの論文の学術的な意義のみならず不足点等も指摘され、さらには研究の進展のための事例や参考文献の紹介などもなされた。それらは執筆者にとって、また研究グループにとっても視野を広げる契機となり、極めて有益な内容であった。

以下に、黒住氏の講演レジュメのうち、最後の総括的な部分を引用する。

本書は、最初のヘーゲルの論理をさらに各地域へと展開しつつ、さらにその地平を調べようとするもの、根茎（じかた、*rhizome*）をも見出すものともいえるようだ。哲学でいうなら、ヘーゲルとともにその次のジエール＝フェリックス・ガタリ（1930-92）の論理を地球上に調べているものともいえる（『アンチ・オイディプス』市倉宏祐訳 1986、宇野邦一訳 2006、原著 *Anti-Oedipus* 1972）。あるいは女性的にはシモーヌ・ヴァイユ（1909-43）の『根をもつこと』（*L'Enracinement*, 1943）に関係するかもしれない。とにかく、本書は、大きくは従来の人間主体・男性中心だけでない、天地・神仏・女性・環境といった見落とされていたが現れ出て来るものを、読者に大事な示唆とともに与えて下さっている。

『自然・人間・神々』全体の意義について以上のような評価をいただき、研究グループとしての、今後の研究の方向性に関する示唆もいただいた。

読了を前提とした書評会ということもあって、研究グループのメンバー以外の参加者は少なかったが、予定の時間を大幅に超えて、3時間に及んだ講演会となった。

（文責 上原雅文）

2. 演題：モダニズムの芸術と文学

講演者：千石英世（立教大学名誉教授）

開催日：2019年7月19日

会場：17号館 216室

共同研究グループ：各国近代文学の研究では、文字通り「各国」の研究状況とその方向性等々を多角的に検討していくことを目指している。メンバーが共有する関心として、これまでも世界文学や翻訳といった論題がとりあげられてきたが、今回は、アメリカ文学研究、翻訳、文芸批評といった広汎な領

域をまたいで活躍する千石英世氏をお招きして、「モダニズムの芸術と文学」と題して、ご講演を頂いた。

まず、今回のご講演のベースとして、千石氏はご論考「思考の水脈——抽象と抽象表現とフォークナー」(2018)を示された。ここには、千石氏の主要なキャリアである文学にくわえ、近年、とみに興味を示されてきた芸術(美術・建築)までもが視野に収められている。そればかりか、参考文献にはシモーヌ・ヴェーユ「重力と恩寵」や、アインシュタイン『相対論の意味』が並び、これらも主要な議論の一部をなしている。

ご講演は、千石氏とそのノート類をまとめた美術家・斎藤義重から、村山知義、岸田劉生へと、水脈を遡行しつつ、日本にもたらされた表現主義／抽象の問題にスポットが当てられていった。それと並行するように、ご講演の通奏低音としては、『響きと怒り』を中心としたフォークナーの手法が論及されていく。ここでいう手法とは、一言でいえばモダニズム、具体的にいうならば、断片化されて複雑に配置された時間軸や、多元描写、意識の流れなどである。翻って、参照される芸術とは、キュビズムのパブロ・ピカソ、そしてドリッピング・アートのジャクソン・ポロックであった。彼らの表現をフォークナー、メルヴィルへと架橋する発想は、すでにクリメント・グリーンバーグによって示されているという。こうして文学／芸術、日本／ヨーロッパ／アメリカが、表現の水脈として連絡される。その連絡がどの程度に実証的なものとしてあるかではなく、連絡させた時に浮かび上がる水脈の連なりが、千石氏のご講演においては、その縦横無尽な展開によって現出＝幻出する。さらに抽象 abstract にフォーカスが絞られれば、「重力と恩寵」というテーマが導入され、(パロックではなく)ゴシックであるという命題のもとに、フォークナー／ポロックが再び招喚される。——強靱な思考が紡ぎ出す、めくるめく水脈を、まざまざと体感したご講演であった。

(文責 松本和也)

3. 演 題：水分子拡散現象に基づく骨格筋微細構造の可視化技術開発

スポーツ／医療分野への次世代型拡散 MRI 技術の社会実装

講演者：畑純一（東京慈恵会医科大学再生医学研究部、理化学研究所、実験動物中央研究所）

中島大輔（慶應義塾大学医学部整形外科教室）

開催日：2019 年 12 月 7 日

会 場：3 号館 206 室

畑先生は水分子拡散現象の制限拡散を示す骨格筋微細構造を対象に、MRI の q 空間（拡散による変位を対象とした波数空間）イメージング（Diffusion weighted imaging と呼ばれる拡散強調撮像法から非ガウス分布を示す制限拡散における水分子の変異を評価し、解析する手法）を用いることで、筋線維の構造と収縮特性を評価できる可能性をマウスやヒトを対象にした実験データを紹介して頂いた。Diffusion weighted imaging は水分子の拡散現象を反映させた撮影方法であり、広い流体内を自由に拡散する水分子を対象としている。生体において、自由に拡散している組織は少なく、拡散が制限された組織が大変であり、制限拡散下では複数のコンパートメントが存在する可能性も指摘されている。コンパートメントモデルは複雑な構造となるので、生体内拡散の解析が複雑化してしまうが、 q 空間イメージングでは、この複雑なモデルを避けつつ、生体組織の制限拡散を解析できる利点がある。筋線維の直径は $10\sim100\ \mu\text{m}$ 、長さ $1\ \text{cm}$ 程度の円筒状の細胞である。 q 空間イメージングでは、この直径方向の構造情報を反映した値を算出し、評価することができるとされている。畑先生が筆頭著者として書かれた論文「Noninvasive technique to evaluate the muscle fiber characteristics using q -space imaging」(PLOS ONE,

14 (4), e0214805, 2019) では、マウス下腿部の骨格筋断面の染色像と q 空間イメージングによる MR 画像を比較したところ、筋種類分布と筋細胞径に有意な相関関係が認められた。このことから、q 空間イメージングは非侵襲でありながら、組織学と同等の精度を持つ筋線維タイプを識別できる可能性があることを示した。中島先生は畑先生とともに開発された MRI の q 空間イメージングの社会実装の事例として、アスリートを対象とした横断的研究のデータ、高校生を対象とした縦断的研究のデータなどを紹介して頂いた。今後、骨格筋疾患の画像診断やそのメカニズム解明において新しい基準をもたらす可能性や、簡易な検査で筋種類分布や筋細胞径に基づくスポーツ適正判定が行える可能性、疲労度合い判定によるリハビリテーションやトレーニングのスケジュール管理、高齢者サルコペニアなどの ADL 低下の原因解明などに貢献することが期待される。

(文責 衣笠竜太)

購入文献解題

『明画全集・第6巻・唐寅（第1, 2冊）』

『明画全集・第7巻・仇英（第1, 2冊）』

『明画全集・第10巻・徐渭（第1, 2, 3冊）』

編 集：浙江大学中国古代書畫研究中心

出版社：浙江大学出版社

出版年：2018年

中国の明代（1368～1644年）は、長編小説『三国志演義』『水滸伝』『西遊記』『金瓶梅』『封神演義』などを生み出した時代であったことはよく知られているが、その時代は、宋代までの伝統文化への回帰、新しい市民社会の形成や生活感あふれる「市民芸術」の開花の時代でもあった。『明画全集』は世界各地の美術館が所蔵する明代の絵画作品を網羅的に蒐集したものである。今期購入したのは、明代の画壇で名を馳せた「呉門画派」の代表的な画家—蘇州の唐寅、仇英、紹興の徐渭の作品集である。これらの作品は、14～17世紀頃の中国の美術だけでなく、当時の社会、文化、服飾、市街、建築、景観、言語などを研究するのに欠かせない貴重な資料となる。

（文責 彭国躍）

『南方徴用作家叢書 ビルマ篇』

編 著 者：木村一信・竹松良明編

出 版 社：龍溪書舎

出版年月：2010 年 2 月

太平洋戦争開戦前夜の昭和 16 年 11 月、多くの文学者は、行き先もミッションも知らされぬまま、いわゆる白紙徴用を受けた。この時、文学者たちは、思想戦の兵士として徴用されて南方各地での文化工作に携わることになり、このミッションに関わった文学者は後に、南方徴用作家と呼ばれる。その概要について、はやくは神谷忠孝「南方徴用作家」（『北海道大学人文科学論集』1984. 2）にすぐれた研究成果があり、以後、南方徴用作家が書いた南方をモチーフとした種々の文書に関する資料整備を中心に、研究が蓄積されてきた。戦前期の文学、ことにアジア・太平洋戦争期の文学を考える際には、南方徴用作家および彼らの書いたルポルタージュや見聞記、小説は、ことのほか重要な意義をもつ。というのも、こうした局面において、文学者は日本国民に対して、大東亜共栄圏の一角を成す「南方（体験）」がいかなるものかについて、具体的な情報―表象を提供することになったばかりでなく、くわえて、おそらくは、今日にまでつづく「南方」の認識地図をつくることに、少なからず関わってきたはずなのだから。

さて、全 14 巻からなる『南方徴用作家叢書 ビルマ篇』は、文字通り南方徴用作家としてビルマに派遣されされた文学者たちが残した文学言説の集成である。以下、各巻ごとの収録作家・タイトルを略記しておく。第 1 巻は高見順（一）、第 2 巻は高見順（二）、第 3 巻は高見順（三）・高田秀二、第 4 巻は小田嶽夫、第 5 巻は榊山潤（一）、第 6 巻は榊山潤（二）、第 7 巻は榊山潤（三）、第 8 巻は豊田三郎、第 9 巻は豊田三郎・北林透馬・清水幾多郎、第 10 巻は山本和夫、第 11 巻は倉島竹二郎、第 12 巻は岩崎榮（一）、第 13 巻は岩崎榮（二）、第 14 巻は平野零児・座談会・対談、といったラインナップである。単行本となったものでも、入手しにくいものも多いが、それ以上に細かい記事や座談会・対談までが修正されている本叢書は、貴重な文献だといえる。

（文責 松本和也）

所員自著紹介

1. 孫安石・大里浩秋編著『中国人留学生と「国家」・「愛国」・「近代」』

(人文学研究所叢書 42), 東方書店, 2019 年 3 月, 345 頁。

本書は、清末から中華民国、そして満洲国の成立を経て、中華人民共和国が成立された直後の一九五〇年代頃までの中国人留学生の諸活動を、近代的な概念である「国家」、「愛国」、「近代」を模索する観点からとらえ直そうとする日中関係史共同研究の成果の一部である。

日本を含む東アジア諸国は、欧米諸国がもたらした近代化の波に立ち向かうため、欧米へ留学生を派遣することで新しい制度と技術を導入するという方針を打ち出した。日本の場合は、まずドイツに向けた留学が始まり、二〇世紀に入るとアメリカへの留学が急激に増え、中国の場合も欧米の新式軍艦と武器の導入を狙った留学生の派遣の動きが一九世紀の中頃には始まり、多くの留学生が日本を目指した。

この日本に押し寄せた中国人留学生の諸活動を明らかにすべく、編者らは神奈川大学人文学研究所の中に同好の士と共に「中国人留学生史研究会」を始め、その後、共同研究の成果として大里浩秋・孫安石編で『中国人日本留学史研究の現段階』(二〇〇二年)、『留学生派遣から見た近代日中関係史』(二〇〇九年)、『近現代中国人日本留学生の諸相:「管理」と「交流」を中心として』(二〇一五年)の論文集を三冊、上梓することができた。これらの論文集で議論した内容は多岐にわたり、一々紹介はしないが、日本の外務省外交史料館が所蔵する日本側の資料と台湾の国史館が所蔵する清国の学部(後に中華民国の教育部)関連の一次資料を中心に、新たな資料と視点を提示しようと努力したつもりである。

研究会では日本と中国との間の不幸な歴史の展開に翻弄される中国人留学生が話題になったこともあれば、留学経費や医療費の実態を論じ合う場面があったり、地方各省の同郷会組織が果たした役割について議論したり、戦後の留学生が置かれた苦悩、具体的に言えば、国民党と共産党の間で一つの政党を選択しなければならなかった現実など、あらゆる側面からの討論を積み重ねてきた。そこで中国人留学生が、清末の時期から中華人民共和国が成立する時期まで、絶えず自問せざるを得なかった思想的課題は、「国家」と「愛国」、そして「近代」という概念ではなかったか、という意識を徐々に共有してきたといえる。

今回の各論文においてもできるだけ以上のような問題意識を共有することに努めた。

「第Ⅰ部 中国人留学生と『国家』の発見」に収められた三本の論文は、初期の中国人留学生によって組織された清国留学生会館、勵志会・訳書彙編社といった諸団体を具体的に上げるとともに、中国人留学生が書き残した日記を通して留学生の生活に迫り、彼ら留学生がどのように「国家」という概念を認識し、中国人としてのアイデンティティーを確立して行ったのか、について検討したものである。

「第Ⅱ部 中国人留学生と文学——『愛国』を求めて」では、中国人留学生の文学作品などから、「国家」と「愛国」の問題を取り上げている。後に汪兆銘政権に協力し「漢奸」になったとされる張資平の作品や鄭伯奇、穆木天、郁達夫など日本に留学した経験を持つ文学者が描いた作品、そして中国人留学生により東京で設立された学術団体の「中華学芸社」がいずれも近代的な意味において「国家」と「愛国」の問題に苦悩する中国人留学生について触れていることは興味深い。中国人留学生研究はいままで歴史、政治、教育分野で扱われることが多いが、留学生が数多くの文学作品を残していることを考えれば文学研究からの視点も重要である。

「第Ⅲ部 戦争と混乱の狭間でみた『近代』」は、中国と日本の関係が破綻し、国家と民族の対立が先鋭化した時期の中国人留学生問題を取り上げている。それまで中国人留学生として受け入れられていた

彼らが、満洲国の建国以来、もう一つの国家のアイデンティティーを持つよう強制させられた苦悩は想像して余りあるものである。満洲国留日学生会の活動と対支文化事業における日本側の記録を駆使した二つの論文は、このような屈折した歴史の動態を検討したものである。結局、中国人留学生は、一九四五年の対日戦争からの勝利と一九四九年の中華人民共和国の建設以降においても引き続き、国家（国民党か、共産党か）と愛国の選択に悩まされていたのであるから、国家と愛国、そして近代の問題の重要さがよく分かる。

本書を作る基礎になった神奈川大学中国人留学生史研究会は、会の結成からほぼ20年にわたり活動を継続しているが、新たな資料の発掘と議論は今でも続いている。中でも今まで最も多くの先行研究があるとされる清末期の研究についても、新たな一次資料の発掘と知見が続くことは予想だにしていなかったことであつた。今後も新たな研究に向けた努力を積み重ねていきたい。

本書刊行後、以下の学術雑誌に書評が掲載された。

- (1) 書評・柴田幹夫、『中国人留学生と「国家」・「愛国」・「近代」』（『神奈川大学評論』第93号、2019年7月）
- (2) 書評・佐藤由利子、『中国人留学生と「国家」・「愛国」・「近代」』（『アジア教育』、第13巻、2019年11月）
- (3) 書評・石田卓生、『中国人留学生と「国家」・「愛国」・「近代」』（『中国研究月報』、第861号、2019年11月）

最後になったが、本書の出版に向けてご支援いただいた神奈川大学人文学研究所、神奈川大学共同研究奨励金、科研・教育交流（基盤B・一般、課題番号17H02686）には、とくに感謝申し上げます。

（孫安石）

2. 上原雅文（編著）『自然・人間・神々——時代と地域の交差する場』

（人文学研究叢書43）御茶の水書房、2019年3月25日、277頁

本書は、共同研究グループ「自然観の東西比較」が、神奈川大学共同研究奨励助成金の交付を受けて行った研究（2015年度～2017年度）の成果論文集である。以下、本書の意図の内容について、「はじめに」で書いたことをもとに概括する。

近代以降、自然科学・技術は、自然を有用な資源と見る機械論的自然観を基盤にして発展し、人類に多大な利福をもたらし続けている。しかし一方、土壌や大気・水・森林などにおける環境破壊をも生じさせている。また近代の自然観は人間観とも連動し、人間をも資源と見なして利用する傾向を世界的なレベルで強めている。特定の地域の土地や人間の文化の固有性を無化し、収奪の対象とする植民地主義は終わってはいないともいえる。資源をめぐる国家間の対立は激化し、民族的・宗教的な対立も絡んで、解きほぐしがたい状況を呈してきている。問題の解決のためには、キリスト教とギリシア哲学を背景にして成立した機械論的自然観の相対化が必要であり、その形而上学的背景の再検討も必要であろう。以上のような問題意識のもとに、我々は、自然との関わり方を、様々な時代や地域の固有性を視野に入れつつ、「人間」、「自然」、「神々」の3項を軸として、つまりは認識主体のあり方をも俎上に載せて、存在論的かつ根源的に探究しようとしたのである。

本書は、8名の執筆者が、機械論的自然観以外の、時代と地域で異なる固有の文化（自然観）を様々な論じている。従って、本書の諸論文は方法的にも領域的にも多様である。執筆者の専門領域は、ドイツを中心とした西洋近代哲学、日本思想史、イタリアなどを中心とした比較文学・芸術、イギリス文学を中心とした昔話・物語研究、宗教改革期のイギリス史、捕鯨問題を軸とした環境倫理、現代のイスラ

ーム社会・文化、中国の風水思想と、多岐にわたっている。本書の副題に「時代と地域が交差する場」と名付けた所以である。
(上原雅文)

3. 中村隆文『リベラリズムの系譜学——法の支配と民主主義は「自由」に何をもたらすか』
みすず書房、2019年4月16日、288頁

本書は、哲学史、法思想史、政治思想史上の「自由」を求める思想と運動の変遷をたどりながら、「自由」の在り方とその可能性について論じたものである。「自由を最大限保障しようとする（自由への干渉を最小化する）」という理論的立場をリベラリズム（liberalism）と位置づけ、そこにはどのような種類のものがあるのかを、それぞれの共通点と差異を示しながら分類・分析している。おおまかな流れとしては、古代ギリシアのソロンやアリストテレス、アウグスティヌスやキケロにはじまり、中世のイギリスの自然法論や、近代のロックの社会契約論やJ.S. ミルの自由論を経て、現代でいえばロールズの『正義論』やマイケル・サンデルのロールズ批判、さらには昨今流行しつつあるリバタリアン・パターナリズムや「ナッジ」まで、さまざまなものを取り扱っている。

本書のポイントとしては、①社会的に求められるところの「自由」という概念が充実したものとなってゆく背景には、法の支配と民主主義との二本柱が機能していること、そして、②両者のバランスこそが必要で、一方が強力になりすぎるとはバランスを崩し、そこから自由の否定につながりかねないこと、というものである。リベラリズムとはどのようなものであるのか、そして、現代の「リベラル」というものが、個人の自由と解放とを求めるリベラリズム本来の趣旨とどの程度まで合致しているのかに興味がある人はぜひ本書を手にとってもらいたい。
(中村隆文)

4. 後田多敦『救国と真世——琉球・沖縄・海邦の史志』
琉球館（Ryukyu 企画）、2019年5月15日、324頁

本書は2000年から2018年までの諸雑誌に掲載された史論や歴史エッセー、批評などをまとめたもの。タイトルのキーワードの一つ「救国」は、19世紀末の明治日本による「琉球処分」に対抗する琉球救国運動から取り出した。もう一つの「真世」は「まーゆ（まゆ）」と読み、石垣島における「豊穰の世」などを表現する語。本書を簡単に要約すれば、「豊穰の世」を希求する琉球の人々の歴史的な営みと、大国の間でゆれる現実の琉球の位置や歴史について論じたものである。

ただ、単なるエッセーや史論集ではない。本書で紹介している事例や史料は埋もれていたものや初出のものも多くあり、新しい史料・史実の紹介も含んでいる。その点は、「滅亡国の歴史」をどう叙述するか、という問題意識からの試みでもある。前著『「海邦小国」を目指して——「史軸」批評による沖縄「現在史」』（出版舎 Mugen, 2016年）の姉妹版。

全体として3章＋付記の構成。第1章の「海邦の群像」では、琉球救国運動やその周辺の人物を掘り起こし、史実を含めて紹介している。第2章「海邦と沖縄の間」では日本との関係史のなかから、沖縄の現状までを論じている。第3章「真世とみるく世界報」では、琉球史の枠組みにかかわる王権や祭祀、明・清との冊封関係、琉球処分や東アジアとの関係などについて話題としている。付記「救国運動の人物誌」では、これまで埋もれていた琉球救国運動にかかわった人物の情報を整理し収録した。

(後田多敦)